

ノルマンディーの片田舎で

石見 徹

(流通経済大学経済学部教授、東京大学名誉教授)

あるフランス人から聞いた話である。名前はカトリーヌとしておこう。

彼女のおばあちゃんはノルマンディー地方で小さな店を持っていた。第一次大戦に従軍した主人は結核を患って復員してきたが、早死にしてしまった。だが息子が一人残された。息子を育てるのに、食料品や日常の雑貨を商いながら、つつましく暮らしていたという。つつましくといっても、家は大きかった。二階建てな上にいくつもの部屋があり、息子の他に母親、つまりカトリーヌの曾祖母と住み込みのお手伝いさんも、合わせて四人と一緒に住んでいた。

ほどなくして、また次の戦争が始まり、ドイツ軍が進駐してきた。軍は多数の兵士を駐屯させるだけの場所が用意できないので、民家にも分宿させることにした。フランス人住民を監視するねらいがあったのかもしれない。祖母の家は広さだけは十分にあったので、二、三人の兵士が割り当てられた。しかし家には、若い兵士たちと同年輩の息子がいたのである。

ドイツ軍が来るのと前後して、この地方でも若い男は徴用に駆り出されていた。遠くドイツにまで連れていかれ、農場や工事現場で働かされているとのことだったが、実はノルマンディー現地の海岸の辺りで、防衛線を築くのに酷使されているという噂も聞こえてきた。いずれにしろ、戻ってくる男はまずいなかった。主人は戦病死したが、たった一人残った息子だけは、何としても失いたくはなかった。この心情はよくわかる。そこで考えついたのは、息子をかくまうことだった。裏通りに面した納戸から上る二階は、母の寝室を通らないかぎりたどり着けないので、隠れ場所にはちょうどいい。こうして息子の引きこもり生活が始まった。

「引きこもり」という言葉を使うと、少し正確ではないかもしれないが、『アンネの日記』にあるように、息をのむような緊張や切迫感があったわけではない。それは間違いない。母は息子が運動不足になることを気遣って、夜の帳が下りると戸外に連れ出し、散歩させることまでした。ドイツ兵たちは、ふだんは見かけない誰かが住んでいることを分かっていたはずだが、何も言わなかった。村の人たちに、徴用を逃れた男がいることを知られるのもまずいが、黙っていてくれるのはありがたい。こうしてドイツ兵との奇妙な同居生活がしばらく続いた。

戦時中といっても、パリのような都会と違って田舎なので、食糧には恵まれていた。パンはむろんのこと、ミルクにバター、チーズ、それに肉にも事欠かなかった。ドイツ兵が住み始めたころ、おばあちゃんは当然のごとく、彼らに好意なんて持ってなかった。自分たち家族用に牛肉を焼きながら、わざと肉の塊に水を注ぐこともあった。ことさらにおいしそうな匂いをかき立て、兵士に嫌がらせしたのである。軍から支給された食糧だけでは、胃の腑も味覚も満たされない若者にとって、この刺激さたまらなかつただろう。

しかし、しばらく同じ屋根の下で住んでいると、しだいに彼らが礼儀正しい若者であることが分かり、親しみがわいてきた。足りなくなった砂糖と塩をたがいに交換することもあった。彼らは冗談交じりに、おばあちゃんのことを「母代わり Ersatzmama」と呼ぶこともあったらしい。祖母は冬が近づくと、彼らの寝床を銅製のアンカで温めてやったりした。中の一人はロシア戦線で凍傷にかかった足が痛むとしきりに訴えるので、桶にお湯を一杯にしてあてが

ったこともあった。

そんな生活が一年近く続いた後、ドイツ兵たちはいずれことしれず立ち去っていった。激しい戦闘の火ぶたが切られたのは、それからさらに何か月が過ぎてからであった。連日、連夜、空爆や砲撃の音が聞こえてきたが、幸いなことに戦場はかなり遠く離れていた。連合軍がやってきた時には、祖母の家は無傷に残っていた。息子も生き延びた。彼は地元の大学で化学を学び、さらに勉強を続けるためにパリに出た。そこで薬剤師を目指す娘と知り合い、カトリーヌが生まれた。

彼女は大学生になって、ケルンの博物館を訪れたことがあった。案内係をしていた中年男は、フランス人だと分かると、戦争中にノルマンディーに駐屯していたことをさも誇らしげに話し始めた。ドイツ語には「フランスで王様のように」暮らすという言い方がある。あの頃は本当によかった、懐かしいと。それで、祖母からたびたび聞かされていたことを思い出した。フランス人にとって、それは決して「王様」のような経験ではなかったはずだ。祖母の家に寄宿していたドイツ兵たちは、ぶじに帰還できたのだろうか。何万人か、何十万人か正確なところは知らないが、派遣兵士の中で、ケルンの博物館員のように昔を懐かしがることができるのは、ごくごく限られた人たちであるに違いない。